

千葉県山武郡大網白里町

# 北後谷横穴

—千葉県立山武農業高等学校グランド造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1 9 8 7

千葉県教育厅施設課

監理 千葉県文化財センター

千葉県山武郡大網白里町

# 北後谷横穴

—千葉県立山武農業高等学校グランド造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1 9 8 7

千葉県教育厅施設課

監修 千葉県文化財センター

## 序 文

千葉県山武郡大網白里町は、房総半島の中部に位置し、太平洋岸に面して自然環境に恵まれていることから、原始・古代から近世に至るまで、数多くの遺跡が所在しております。

このたび千葉県教育委員会では、千葉県立山武農業高等学校の施設の整備・拡充の一環としてグランドの造成工事を計画しました。

そこで、用地内に所在する横穴の取扱いについて慎重な協議を重ねた結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存の措置を講じることになりました。発掘調査は、(財)千葉県文化財センターが実施することになり、昭和62年1月6日から1月30日まで調査を行ないました。

発掘調査の結果、比較的保存状態の良い横穴であることが判明し、当地域における古墳文化を解明するための貴重な資料となりました。

このたび、その調査成果を「北後谷横穴」として刊行することになりました。本書が学術資料としてはもとより、文化財の保護・普及のために広く一般の方々に活用されることを願ってやみません。

終りに、発掘調査から報告書刊行まで種々御指導いただいた千葉県教育庁文化課をはじめ、千葉県教育庁施設課、並びに地元関係機関各位のご協力に對し厚くお礼申し上げるとともに、酷寒の中で調査に従事された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和62年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 山本孝也

## 例　　言

1. 本書は、千葉県山武郡大網白里町における北後谷（きたうしろやつ）横穴の発掘調査報告書である。
2. この調査は、千葉県立山武農業高等学校のグランド造成に伴う調査として、千葉県教育庁施設課の委託を受けた財団法人千葉県文化財センターが、千葉県教育庁文化課の指導のもとに実施したものである。調査は昭和62年1月6日から1月30日まで実施し、その後整理作業を2月28日まで行なった。
3. 発掘調査・整理作業および本書の作成は、調査部長鈴木道之助、同部長補佐古内茂の指導のもとに、班長高橋賢一の助言を得て、主任調査研究員小久賀隆史がこれにあたった。
4. 図版1の航空写真は京葉測量株式会社の提供によるものである。
5. 発掘調査から報告書の刊行にあたっては、下記の諸機関の御指導・御協力を賜りました。記して諸意を表します。

千葉県教育庁施設課、財団法人千葉県都市公社、千葉県教育庁文化課、千葉県立山武農業高等学校、大網白里町教育委員会、財団法人山武郡南部地区文化財センター、株式会社つくも、堀内建設株式会社

## 目 次

### 序 文

### 例 言

I. 調査の概要 .....	5
1. 発掘調査に至る経緯.....	5
2. 調査の方法と経過.....	5
II. 横穴の位置と歴史的環境.....	5
III. 横穴とその出土遺物 .....	8
IV. まとめ .....	8

## 挿 図 目 次

第1図 横穴の位置と周辺の横穴 (1/50000) .....	6
第2図 北後谷横穴周辺の地形図 (1/5000) .....	7
第3図 北後谷横穴地形図 (1/500) .....	9
第4図 横穴実測図 (1/80) .....	11
第5図 羨道部遺物および石塊出土状況 (1/20) .....	13

## 図 版 目 次

図版1 横穴周辺航空写真 (京葉測量株式会社提供)

図版2 1. 調査前全景 2. 調査前近景

図版3 1. 横穴土層断面 2. 横穴羨道部石塊出土状況 3. 横穴棺台・奥壁

図版4 1. 横穴玄室A右側壁 2. 横穴玄室B左側壁 3. 横穴玄室B天井部 (整形痕)

図版5 1. 調査後全景 2. 調査後近景

図版6 出土遺物

## I. 調査の概要

### 1. 発掘調査に至る経緯

千葉県教育庁施設課は、千葉県立山武農業高等学校の施設の整備・拡充の一環としてグラウンドの造成工事を計画した。これに伴い千葉県教育庁文化課に予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会があった。文化課では予定地内の埋蔵文化財の所在確認の現地踏査を実施し、横穴1基が存在する旨回答した。

これに基づき関係機関と協議を重ねた結果、代替用地のめどが立たないこと、年度内に造成工事を完了すること等の条件があり、やむを得ず記録保存の措置を講じることになり、当センターが発掘調査を実施することになった。

### 2. 調査の方法と経過

調査は、開口している横穴1基を対象としていたが、周囲に埋没している横穴や他の遺構の存在も考えられたので、横穴の立地する斜面全域も対象に加えて実施した。

調査は昭和62年1月6日に開始し、1月30日に終了した。

1月6日～9日 器材の搬入、設営等諸準備の後、横穴の立地する斜面の清掃、調査前の写真撮影及び横穴前面の平坦面の平板測量を行なった。測量は任意の基準点を設置した上で、国土方眼座標に置換する方式を採用した。

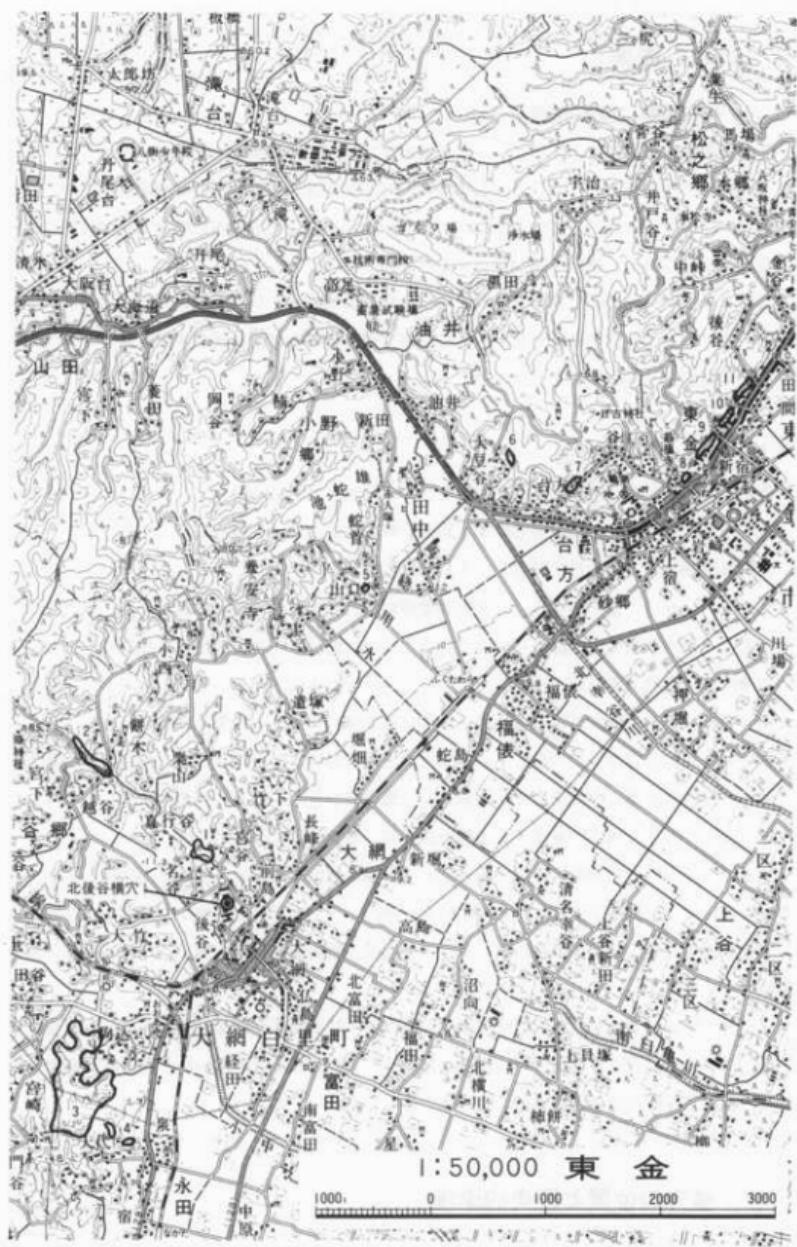
1月12日～16日 横穴外部の表土除去作業には重機を使用し、岩盤を露呈させた後人力により露呈面の清掃を行ない、埋没している横穴や他の遺構の検出を行なった。横穴内部の調査は玄室から羨道部を通る中軸線により半載し、土層観察を行ないながら進めた。

1月19日～23日 横穴内堆積土の土層断面実測、写真撮影を行なった後、セクションベルトを除去し、横穴内の精査を行なう。羨道部から石塊が出土したので、その出土状況を実測、写真撮影を行なった後除去する。横穴内の精査の後、トランシットとレベルを使用し、水糸を用いて基準線を設定し、出土遺物のとり上げ、平面図、断面図の作成を行なう。横穴外部の調査も併せて行なう。

1月26日～30日 横穴内の平面図、断面図の作成、写真撮影を行なう。横穴外部の調査の終了後、再び横穴前面の平坦面の平板測量を行なった。調査区全域の清掃後、全景写真撮影を行なった。その後器材等の撤収を行ない調査を終了した。

## II. 横穴の位置と歴史的環境

北後谷横穴は、山武郡大網白里町金谷郷字向谷214他の地籍に所在する。この地域一帯の地形



第1図 横穴の位置と周辺の横穴



第2図 北後谷橋穴周辺の地形図(1/5000)

(大網白里町作成の国土基本図区-LF 71-1,3を縮小使用)

は、やせ尾根状の丘陵群と樹枝状に入りこんだ狭い谷により形成されている。横穴は金谷郷丘陵と呼ばれる丘陵群の先端部で、九十九里平野に臨む標高40m程の丘陵の南斜面に立地している。この丘陵は地質的には笠森層と呼ばれる泥質砂岩を基盤にしており、横穴もこの泥質砂岩を掘り込んで構築されている。

周辺の遺跡分布は、本地域の地形の特徴を反映して、全体に希薄で大規模な集落がなく、反対に横穴が多く分布している。

周辺に分布する横穴としては、本横穴の北西0.5kmに宮谷横穴群、北西1.7kmに餅木横穴群、南西2kmに瑞穂横穴群、永田横穴群などが知られている。また東金市南部にも多くの横穴が分布し、千葉県における横穴の集中地帯の一つとなっている(第1図)。この地域の横穴は古くから知られているにもかかわらず、調査例が少なく実態も不明であったが、最近ようやくその実態が明らかになりつつある。今後の調査に期待したい。

1. 宮谷横穴群(7基) 2. 餅木横穴群(9基) 3. 瑞穂横穴群(43基) 4. 永田横穴群(3基) 5. 千段穴横穴 6. 朱塗の横穴 7. 谷横穴群(13基) 8. 岩崎横穴群 9. 新宿横穴群(19基) 10. 上行寺裏横穴群(7基) 11. 玉崎神社裏横穴群(29基)

### III. 横穴とその出土遺物(第2~5図、図版1~6)

#### 〈調査前の状況〉(図版2-1, 2)

横穴は山武農業高等学校と大網中学校の建設によって周囲が削平され、半ば独立した様相を呈する丘陵の中腹、標高27m程の南斜面に立地している。斜面下の平坦面と羨道部底面との比高差は5.5mを測るが、この平坦面は10m近く土盛されており、本来は約15mの比高差を測る。

発掘調査以前から開口しており、玄室内にビニールや藁屑が投げ入れられており、近年は「ムロ」として使用されていた。旧地主の話を総合すると、開口した時期は相当古いものと思われる。

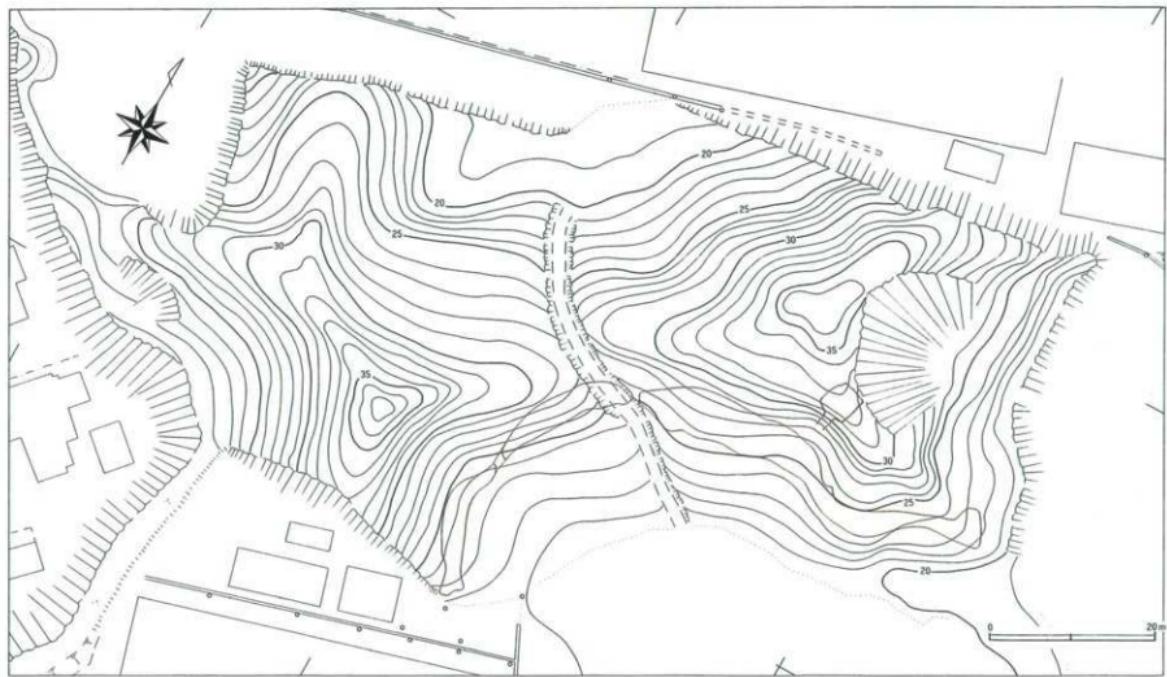
#### 〈堆積土の状態〉(図版3-1)

16層に分けられた。第2層は有機質を多量に含んでおり、横穴が後世何らかの目的で使われた際に客土されたものと思われる。

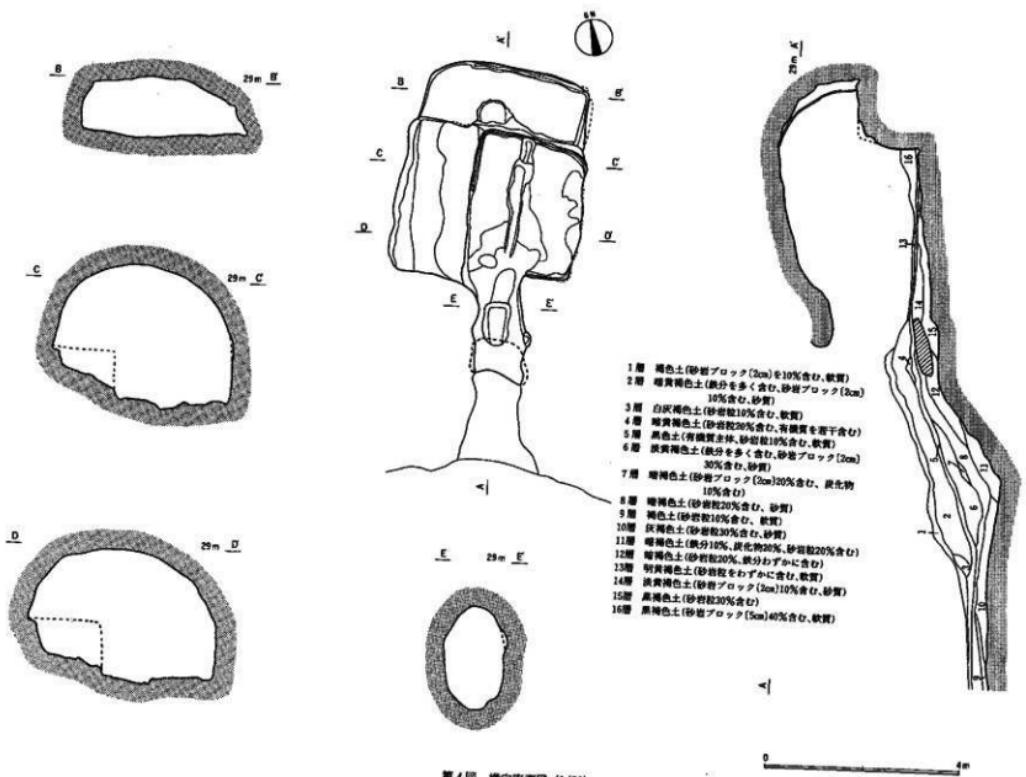
#### 〈横穴の構造〉

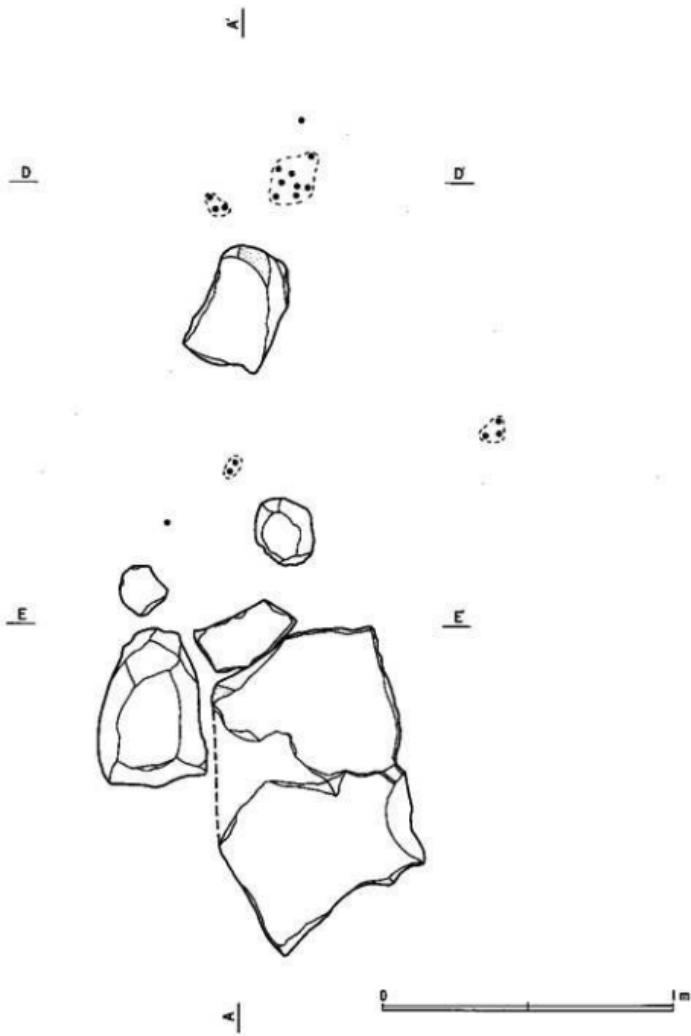
南南西方向に開口しており、玄室・羨道部より構成される。本横穴は調査の結果から拡張されたものと考えられるので、便宜的に拡張前を玄室A、拡張後を玄室Bとして説明する。

玄室A一平面形は縦長の長方形で、片袖形を呈する。棺台・棺床共にない。排水溝は左側壁の一部を除いてほぼ全周する(右側壁の部分は擾乱によって失われたものと思われる)。玄室中央や左寄りの溝状の掘り込みは、使用されている工具の違い、掘り込みの状況などからして



第3図 北接谷横穴地形図 (1/500)





第5図 義道部遺物および石塊出土状況 (1/20)

後世のものと判断した。床面はほぼ平坦で、羨道部に向って緩やかに傾斜している。羨道部との境が擾乱が多く遺存状態が悪い。遺存している右側壁はほぼ垂直に立ち上がる。側壁下部には構築時の整形痕が明瞭に残っている(図版4-1)。

玄室B—平面形は縦長の長方形で、両袖形を呈する。棺台は奥壁沿いに造られている。棺床はない。左側壁沿いは、地山の岩盤が奥壁から羨道部に向って傾斜して荒掘り状態で遺存している。これは天井のカーブの度合や側壁の遺存状況などからして、本来は左側壁沿いにも棺台が造られていたが、後世何らかの理由により破壊されたものと思われる。ここに残る工具痕はつるはし状のものであり、他とは明らかに異なっている(図版4-2)。したがって玄室Bは本来L字形の棺台を有していたものと思われる。排水溝は奥壁から右側壁沿いに造られているが、造り方も粗雑で、排水溝とするにはやや疑問が残る。ここに残る工具痕は幅4~5cmのノミ状のものである。

両側壁・奥壁の遺存状態は一部を除いて良好である。両側壁は内湾気味に立ち上がり、天井部との境は不明瞭である。天井部は半球形をしており、形態はドーム形を呈する。奥壁は内湾気味に立ち上がり、天井部との境は不明瞭であるが、陰刻によって天井部・側壁との境を画している(図版3-3)。両側壁から天井部にかけては構築時の整形痕が明瞭に残っている(図版4-3)。手斧状の工具と思われ、整形痕の単位は長さ30cm、幅10cm、深さ0.8~1cmを測る。

羨道部—平面形は縦長の不整な長方形を呈する。両側壁はほぼ垂直に立ち上がり、天井部との境は不明瞭で、天井部はドーム形を呈する。壁面・天井部共に遺存状態は悪い。底面は羨門部方向に緩やかに傾斜し、やや玄門部寄りに0.9m×0.5mの長方形の浅い掘り込みが認められる。掘り込みの状況からして横穴に伴うものと考えられるが、性格は不明である。この掘り込みの周辺から石塊が6点出土している(第5図、図版3-2)。この石塊は遺存状態は良くないが、多くは切石状の面が認められ、地山の岩盤と同質のものである。その出土状態からして、ここでは一応閉塞に伴うものと考えておく。

以上の点からして本横穴は、当初片袖形で棺台を欠く小規模なものであったが、後に奥壁側と左側壁側が拡張されて、両袖形となり、L字形の棺台が設けられたものと思われる。

#### 〈出土遺物〉(図版6)

羨道部から玄室にかけての部分で、床面から20cm前後浮いた状態で若干の遺物が出土している。内訳は陶磁器20点、骨片2点、礫1点、貝1点である。いずれも細片で図示に耐えない。図版6-1は磁器の染付碗である。素地は白色で、上釉はやや青味がかった乳灰色を呈する。文様の部分はくすんだ藍色を呈する。2は志野の碗である。素地は白色で、上釉は明灰色を呈する。3はワスレガイ(*Cyclosunetta menstrualis*)である。房総半島以南に生息するという。普通食用にしない。全体にチョーク化しており、殻表は剝離が著しく、平滑でない。腹縁内面は刻まれる。4は玉髓製の礫である。火を受けている。5は人骨(大腿骨)と思われる。火を

受けている。6はイノシシまたはシカの上腕骨と思われる。

以上いずれの遺物も本横穴に伴うものではない。陶磁器の示す年代からすれば、江戸時代後期には既に開口していて、何らかの形で利用されていた可能性が高い。

#### IV. まとめ

今回の調査は、横穴1基のみの調査で、出土遺物も少なかったが、当地域における古墳文化について新しい資料を提供することになった。ここでは得られた成果を整理し、一応のまとめを行ない、若干の私見を述べてみたいと思う。

さて、通常横穴の調査が行なわれる場合、単独の横穴を対象とすることはまれであり、今回も周辺に他の横穴の存在を考えて調査を行なったが、新たな横穴の発見はなかった。とすれば当初より単独で構築されたのかということが問題となる。本横穴の周辺は前述のように大きく削平されている。復原される旧地形および当地域における横穴のあり方からすると、本来は周辺に横穴が存在し、比較的広い範囲で群を構成していたものと思われる。あるいは未だ発見されていない横穴が存在するのかもしれない。

玄室は拡張されており、当初片袖形で棺台を欠く小形のものから、両袖形でL字形の棺台を有するものへと作り変えられたことがわかる。このことから当地域においては、棺台を欠くものから複数の棺台を有するものへと変化していった可能性が考えられる。

羨道部からは石塊が出土している。県内の横穴の閉塞施設については十分明らかでなく、さまざまな施設・方法が想定されている。羨道部から石塊・切石等が検出されている例もあり、本横穴もその出土状況からして、この石塊は閉塞施設の一部で、底面からさほど浮いていないことから、積み上げた石の基部にあたると思われる。

近年調査された東金市上行寺裏横穴群（6・7号横穴）、大網白里町瑞穂横穴群の内容と比較すると、地域的に近いにもかかわらず異なった様相を呈している。この違いが時期的なものかあるいはこの地域における特徴なのかは、資料不足のため明らかにし得ないが、この地域が上総における横穴の北縁部に当たることから、他地域の様相が複合された結果多様な様相を示すのではないだろうか。

本横穴の年代については、共伴する遺物が全く明確にし得ないが、周辺の調査例および今迄の研究成果などから考えて、一応7世紀後半という大まかな年代を与えておきたい。

一つの地域における横穴の変遷を明らかにする場合、横穴の多くが既開口で共伴する遺物が少ないことが大きな障害となっている。しかし、横穴の構造を軸に共伴遺物との組み合わせによる編年も次第に成果を上げつつある。今後はこうした地域内の変遷を明らかにすると同時に地域相互の総合的な比較・検討が必要である。横穴が多く存在する地域は、今後次第に開発が

及んでいくものと思われる。横穴造営の基盤となった集落を含めた組織的な調査が望まれる。  
今回の調査は得られた成果は決して多くはないが、調査例の少ない当地域にあって、さらに  
横穴の調査ということで、貴重な資料を提供したと言えよう。

### 参考文献

- 池上悟 1975 「横穴墓の地域性」 関東（房總・常陸）『考古学ジャーナル 110』  
及川淳一 1982 「山崎横穴群」 （財）千葉県文化財センター  
大網白里町教育委員会 1981 「千葉県大網白里町埋蔵文化財分布地図」  
杉山晋作他 1972 「西国吉横穴群」 西国吉横穴群発掘調査団  
橋山林継他 1973 「大溝横穴群調査報告」 岩坂大溝横穴調査団  
千葉県文化財センター 1986 「千葉県埋蔵文化財分布地図（2）一千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区一」  
野中徹也 1977 「西山横穴群調査報告書」 西山横穴群発掘調査団  
橋口定志 1972 「千葉県・夷隅地域の横穴について—その編年的考察」『物質文化 19』  
橋口定志他 1983 「東前横穴古墳群」 夷隅郡教育委員会  
平岡和夫他 1983 「上行寺裏横穴」 山武考古学研究所  
山口直人他 1986 「瑞穂横穴群」 （財）山武郡南部地区文化財センター  
渡辺政治 1986 「上総地方の横穴墓について」『研究連絡誌 18』 （財）千葉県文化財センター

タ－

# 写 真 図 版



横穴周辺航空写真 (1/5000, 昭和42年撮影)



1. 調査前全景



2. 調査前近景



1. 横穴土層断面



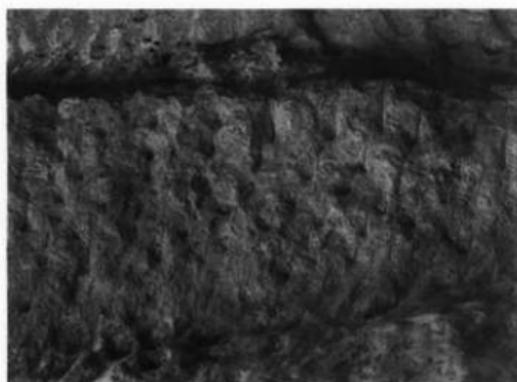
2. 横穴葬道部  
石塊出土状況



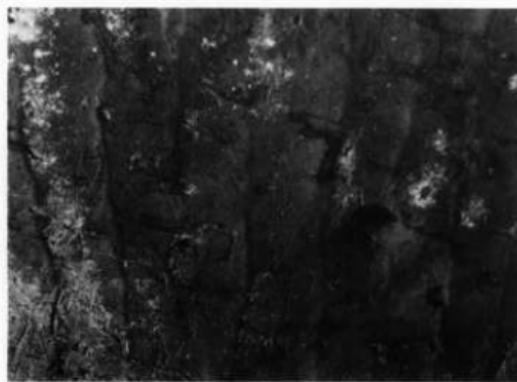
3. 横穴棺台・奥壁



1. 横穴玄室A  
右側壁



2. 横穴玄室B  
左側壁



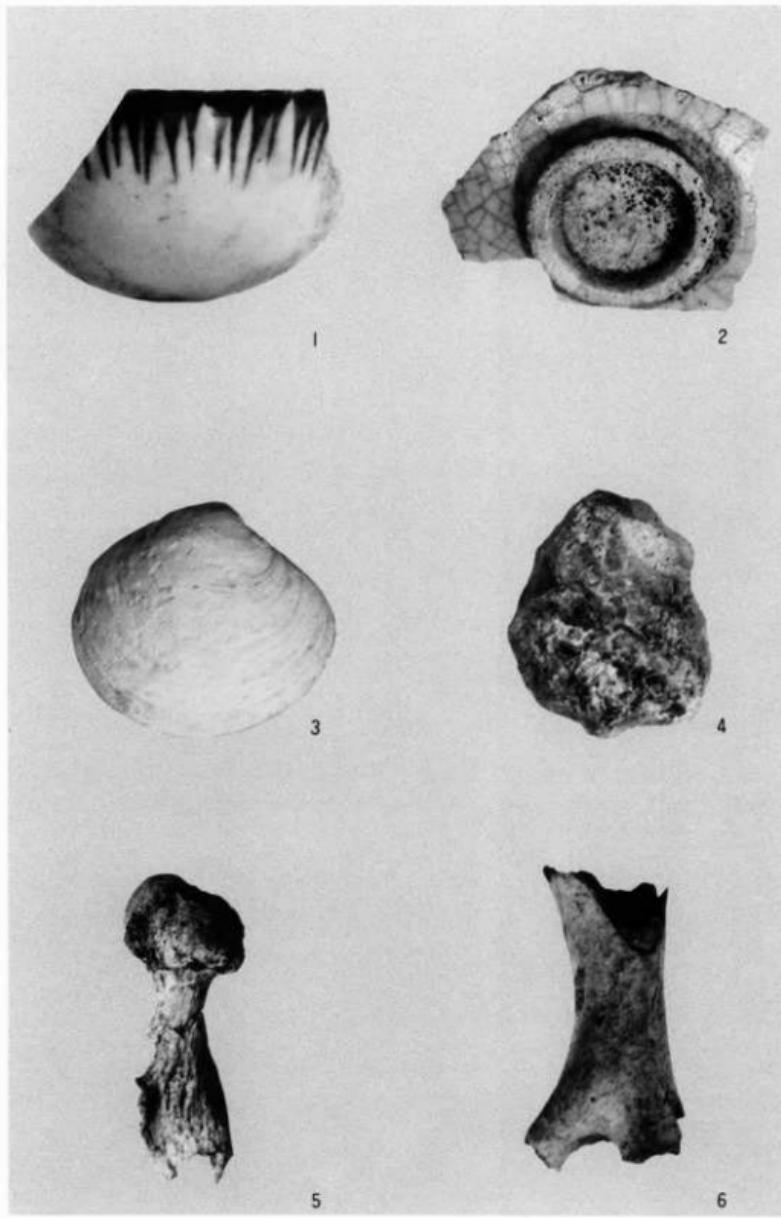
3. 横穴玄室B  
天井部(整形痕)



1. 調査後全景



2. 調査後近景



出土遺物

千葉県山武郡大網白里町  
北後谷横穴  
—千葉県立山武農業高等学校グランド造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

印 刷 昭和62年3月20日  
発 行 昭和62年3月31日

---

発 行 千葉県教育庁施設課  
千葉市中央4-13-28  
財団法人 千葉県文化財センター  
千葉市葛城2-10-1 (0472)25-6478㈹  
印 刷 株式会社 弘文社  
市川市市川南2-7-2 (0473)24-5977㈹

---